

学位論文の要旨

専攻 社会文化学専攻

学生番号 75425111

氏名 呂 建輝 印

1 論文題目

漢語の連濁と意味用法の史的変遷に関する研究

2 論文の要旨

漢語連濁の研究は従来、共時的に条件を探る方法が多かった。この方法では、ある程度の傾向性がみられるものの、例外も多い。そこで本論文では共時的な方法だけでなく、漢語連濁の史の変遷といった通時的な方法も使い、「～産」「～勢」「～本」を対象に、各時代の連濁状況を明らかにし、現代での連濁条件を再検討した。

第1章は「～産」の連濁の史の変遷についての考察である。「～産」は最初に二字漢語の後部要素に使われ、鼻音の前接によって連濁していた（難産・安産など）。江戸中期になり「～産」に和語の前接ができるようになり、この場合の「～産」は和語化が進み連濁した（うい産・のち産など）。この時期までに出来た「～産」の語彙は、連濁語は意味上「出産」を表すものに集中し（難産・うい産など）、非連濁語は「出産」を表さないものに集中している傾向があった（土産・財産など）。この影響により、江戸後期以降、鼻音前接のない二字漢語にも「出産」の意味を表すことによって、濁音形で出現することがあった（逆産・早産など）。一方で江戸後期に「出産」の意味を表さない語彙のグループには、「産地」を表す清音形の「～産」があった（倭産・国産など）。この「産地」を表す用法は江戸末・明治期より、自立語を受けるようになり前接語彙が拡大し（日本産・外国産など）、接尾辞「～サン_産」へと移行していった。以上の連濁の史の変遷を経て、現代では「～産」は和語前接の場合は連濁し、二字漢語の場合は基本的に連濁しない。但し「出産」の意味を表す場合は連濁する場合がある。一方で「～産」の連濁とは別に接尾辞「～サン_産」があり、地名語に付いて産地を「類別」（ある集合体を分類すること）する。

第2章は「～勢」の連濁の史の変遷についての考察である。「～勢」は最初に二字漢語の後部要素に使われ、鼻音の前接によって連濁していた（軍勢・番勢など）。平安末・鎌倉初期より和語前接の「～勢」が出現し、和語化が進み連濁していた（みせ勢・すけ勢など）。これにより、和語前接の「～勢」はどのような兵隊かを「類別」するのに使われるようになり、室町時代に和

語前接の「～ゼイ_勢」が多数で、濁音形「～ゼイ_勢」は接尾辞へと移行していった。さらに接尾辞「～ゼイ_勢」は、前接部が漢語のものにも及び、前接する語彙が拡大した（関東勢・奥州勢など）。近代以降、接尾辞「～ゼイ_勢」は前代で和語動詞連用形に接続する語（みせ勢・すけ勢など）が消滅し、前接部が地域名・国名などの固有名詞に限られるようになった（大阪勢・アメリカ勢など）。これは、接尾辞は名詞的成分に付きやすく、形容詞的成分によって修飾されにくい、という性質をもっているからだと思われる。また兵隊を「類別」する用法から、競技グループを類別するのに使われるようになった。以上の連濁の史的変遷を経て、現代では「～勢」は和語が前接する場合は連濁し、二字漢語の場合は基本的に連濁しない。一方で「～勢」の連濁とは別に接尾辞用法「～ゼイ_勢」があり、固有名詞に付いて競技グループを「類別」する。

第3章は「～本」の連濁の史的変遷についての考察である。「～本」は古く「手本」の意味であった。最初に二字漢語の後部要素として現れ、鼻音の前接によって連濁していた（張本・根本など）。平安中期より和語前接の「～本」が出現した（て本・すり本など）が、連濁することはなかった。これは、立派・正式なものに使われたことにより、和語が前接しても「～本」は漢語らしさを保持していたからだと思われる。室町時代に入り、「本」は「手本」の意味から「書籍」の意味に変わった。これにより「本」は日常語化し、和語が前接すると連濁するようになった（まき本）。日常語化した「～本」はその使いやすさから、江戸時代に多数の前接部をうけるようになった。和語に付く（かき本・あか本）ほかにも、漢語に付くことも可能となった（浄瑠璃本・当世本など）。これらの場合も濁音形「～ボン_本」で使われていた。こうして濁音形「～ボン_本」は接尾辞へと移行し、前接する語彙が拡大した。明治期以降、江戸期に連濁していた「こ本」「あか本」「くろ本」「あお本」「かき本」などに清音化が起こった。これは「～勢」の場合にもみられたように、接尾辞は名詞的成分に付きやすく、形容詞的成分によって修飾されにくいという特性をもっているからだと思われる。前接部が形容詞的成分の「こ本」「あか本」「くろ本」「あお本」「かき本」は接尾辞「～ボン_本」にふさわしくないものとして排除され、清音になったと考えられる。以上の連濁の史的変遷を経て、現代では「～本」は基本的に連濁しない。一方で「～本」の連濁とは別に接尾辞用法「～ボン_本」があり、名詞的成分の語に付いて書籍を「類別」する。

第4章は接尾辞「～サン_産」「～ゼイ_勢」「～ボン_本」の特徴についての分析である。「～サン_産」「～ゼイ_勢」「～ボン_本」は清濁・アクセントの偏りがみられること、自立性を欠くが他の語に付いて産地・競技グループ・書籍を「類別」する意味が生じること、強い造語力をみせることから、本論文では接尾辞としている。但し接尾辞「～テキ_的」「～カ_化」「～チュウ_中」と違い、品詞を変える機能を備えないこと、アスペクチュアリティなどの文法的意味を生み出さないこと、「類別」に使われることなどから、「～サン_産」「～ゼイ_勢」「～ボン_本」は「～テキ_的」「～カ_化」「～チュウ_中」とは違う性質をもつ接尾辞だと思われる。

(注) 2,000字程度にまとめること。